

2026年1月28日

武蔵野美術大学 学長 殿

海外研修報告書

下記の通り、海外研修の報告をいたします。

記

氏名	山中一宏	所属	工芸工業デザイン学科
		職位	教授

研究課題	プロダクトデザインと周囲環境の関係性について
研究先機関	ロンドン市内 美術館 ギャラリー
主な滞在地 (国・都市名)	イギリス・ロンドン
渡航日程	2025年11月24日 ～ 2025年11月27日 (4日間)
研究目的・理由	ロンドンの美術館・ギャラリーにて次世代のデザイン分野についての情報収集、研究を行う為。
研究成果発表予定 (展覧会、著書、 論文発表等)	作品発表等を通して。 また、授業内にて内容報告。今後の授業内容・展開に幅広く反映させる。

研究内容

本研究課題に関連し、イギリス・ロンドンにおける海外研修を実施した。本研修では、現代美術およびデザイン分野における表現手法や制作プロセス、ならびに教育環境について理解を深めることを目的とし、以下の施設を訪問した。

1. White Cube Bermondsey
2. Lisson Gallery
3. Goldsmiths, University of London

ギャラリーでの調査では、研究対象としているアーティストの作品および関連資料を実際に鑑賞し、思考・コンセプトがどのように立体表現へと展開されていくのかを確認した。作品そのものだけでなく、展示空間の構成や作品同士の関係性からも多くの示唆を得ることができ、制作意図と表現手法の結びつきをより具体的に捉える機会となった。



White Gallery Bermondsey 撮影日 2025年11月25日(火)

Lisson Gallery では、こちらも研究対象としているアーティスト Tony Cragg の作品を通して、造形と空間の関係性についての考察を行った。あわせて、思考や制作過程に関するアーカイブ資料を特別に閲覧する機会があり、作品が完成に至るまでの過程や試行の痕跡を知ることができた。これらの資料に直接触れる体験は、日本国内では得がたいものであり、研究内容を考えるうえで大きな手がかりとなった。



Lisson Gallery 撮影日 2025年11月25日(火)

大学関係者との交流としては、Goldsmiths, University of London デザイン学科の Roberto Feo 教授と意見交換を行った。現在の研究動向や授業内容、カリキュラム編成の考え方、学生の傾向などについて話を伺

	<p>い、イギリスの美術・デザイン教育の実情を具体的に知ることができた。現場での教育実践に基づいた話は、日本の教育環境を考えるうえでも参考になる点が多かった。</p> <p>また、今後の学術交流の可能性についても話題となり、近い将来、訪問教授として来日いただくことについて前向きな意向を得ることができたのも大きな収穫であった。</p> <p>今後の研究および教育活動において、国際的な視点を取り入れるうえで意義のある成果であると考えている。</p> <p>今回の研修を通じて、デザインを教える学科においては、社会や時代の変化に応じて授業内容やカリキュラムを更新していくことの重要性を改めて感じた。同時に、今後の学科の方向性を検討するうえで、多くの示唆を得ることができた。本研修で得られた知見を、今後の研究および教育活動に積極的に活かしていきたい。</p>
<p>大学授業における研究成果の還元</p>	<p>授業内にて内容報告。今後の授業内容・展開に幅広く反映させる。</p>

研究日程（全滞在期間）

出発日 (現地時間)	出発地 (国・都市名)	到着日 (現地時間)	到着地 (国・都市名)	研究内容等	滞在 日数
11/24	日本・東京	11/25	イギリス・ロンドン	美術館、ギャラリー視察	3
11/26	イギリス・ロンドン	11/27	日本・東京		
備考					

以上

- ※ 欄が不足する場合は、適宜、行を挿入するなどして記入してください。別紙添付も可。
- ※ その他特記事項等がある場合は、備考欄に記入してください。